

【論 説】

プリユタネイオンで正餐を ——祭祀共同体としてのポリスの形成——

的射場 敬 一

目 次

はじめに

1. 供犠と女神ヘステイア

1.1. 供犠

1.2. 女神ヘステイアと炉

2. オイコスとヘステイア

2.1. オイコス、ヘステイア家と炉

2.2. 嘆願の場としての炉

3. ポリスの形成

3.1. プリユタネイオンとポリスの形成

3.2. ポリスの統治機構とプリユタネイオン

結びに代えて

はじめに

ポリスとは、紀元前8世紀頃の古代ギリシアにおいて、村落や地方都市の住民の集住^{シユノイクスモス}、すなわち都市への共同移住によって形成された都市国家である。古代ギリシア人をポリス形成へと促したのは、マックス・ウェーバーによれば、当時の「慢性的な戦争状態」である。人びとは、自衛のために村落や地方都市の住民を一つの都市に統合し、より強固な防衛能力をもつ国家組織を立ち上げたのである。このように、ポリスとは人為的に作られた防衛団体であったがゆえに、その住人たちは、より自然的に形成された他の地域の都市住人たちや近世の都市住人たちとはまったく異なる市民感覚を発達させ

プリュタネイオンで正餐を（的射場）

ていた¹⁾。ヘロドトスによる以下の記録は、ポリスをポリスタらしめていたのは、まさしく防衛団体としての性格であったことを証言している。

ペルシア戦争において、古代ギリシアの最も強大なポリスの一つであったアテナイは、侵攻してきたペルシア王クセルクセス一世の軍に占領され破壊され、アテナイ市民は都市城壁の外に追い出された。ペルシアとの戦いの雌雄が決せられたサラミスの海戦の直前の出来事である。しかし、この未曾有の危機に際して、アテナイの将軍テミストクレスは、ギリシアの同盟諸国の将に対して次のように述べたのである。

自分たちの兵員を具えた二百の艦船のある限り、自分たちには彼ら同盟諸国よりも強大な国家と国土があるのだ、現にアテナイの攻撃を撃破しうる力のある国は、ギリシア中を探しても一国だにないではないか²⁾。
(ヘロドトス『歴史』)

このテミストクレスの発言は、サラミスの海戦に向けたギリシア同盟諸国の作戦会議において述べられたものである。コリントスの将軍が、国家を失った者には作戦会議における発言資格はないと迫ったのに対し、テミストクレスは、たとえ都市を失おうとも市民兵士と艦船が健在な限りアテナイは依然として国家であり、しかも同盟諸国のどの国家よりも依然として強大であると吠えたのである。

常識的に考えれば、都市国家アテナイの都市が他国の軍隊によって占領され破壊し尽くされているのを見れば、アテナイは滅びたと思うのが自然であろう。歴史的に見ても、都市とりわけ首都の陥落は、大抵の場合、国家の滅亡を意味している。だが、テミストクレスの発言は、こうした常識とは異なるところに、古代ギリシア人は、あるいは少なくともアテナイ人はいたということを示している。アテナイという都市は間違いなくアテナイ・ポリスの政治行政的および経済的中心地であるものの、ポリスが意味するのは都市空間それ自体ではなかったのだ。ポリスという政治組織においてより重要なのはむしろ人的結合の側面であり、それは集住による自衛力の強化というポリ

プリュタネイオンで正餐を（的射場）

ス形成の理由に鑑みれば自明といえよう。換言すれば、ポリスとは、協力して防衛に携わる市民たちの共同体を意味する言葉なのである。だからこそ、アテナイという都市の陥落が、アテナイというポリスの滅亡を意味しなかったのである。ブルクハルトはポリスを「生命を持った一つのまとまった政治体」³⁾と呼んだが、ポリスの生命力とは、まさにこのような、都市という実質的な生活空間を奪われてもなお衰えない、市民たちの強固な団結力であったといえる⁴⁾。

本稿が扱うのは、こうした古代ギリシアのポリスにおける市民団の強固な結束が、どのようにして可能だったのか、という問題である。ポリス設立の目的が自己防衛であり、それは団結を必要とするといっても、そもそも結成されたポリスが自分たちのものであるという意識がなければ、共同体の一員として協力して防衛に携わるという意識も生じないであろう。アテナイ人は、自分たちがスパルタ人でもコリントス人でもましてヤベルシア人でもなく文字通りアテナイ人であると自覚しているからこそ、一致団結して戦争に臨むことができたのである。本稿は、ポリスにおける共同体のアイデンティティは、それぞれのポリスがまずもって祭祀団体として設立されたという事実によって担保されていたと論じる。ポリスとは、女神ヘスティアヘスティアと彼女が司る 炉 とが共同体形成の核心となっている、いわば「宗教的」共同体であったのである。

1. 供犠と女神ヘスティア

1.1. 供犠

まずは古代ギリシアにおける宗教的な営みとはどのようなものであったのかを、ポリスの形成とほぼ同時期に完成したとされるホメロスの英雄叙事詩『イリアス』から見てみよう。

兵士らは座を立てて散り、己れの船をめざして急ぐと、陣屋の中で煙を

プリュタネイオンで正餐を（的射場）

立てて火をおこし、食事をとる。また願わくは乱戦のさなか、死を免れさせ給えと祈願をこめて、それぞれ思い思いに、永遠にいます神々のいづれかに生贄いけにえを捧げる⁵⁾。（ホメロス『イリアス』）

この引用が示すように、古代ギリシアにおいて宗教的実践の大きな部分を占めていたのは供犠の習慣であった。一般兵士たちは、食事の際に神々に生贄を捧げ、戦闘における自らの無事を祈ったのである。これに対して、次に見るギリシア軍の総帥アガメムノンが主催した会食とそこでの供犠には、戦勝祈願のみならず、共同体の結束を高めることが目的とされている。

一方、総帥アガメムノンは、権勢比類なきクロノスの子に、見事に肥えた5歳の牡牛を生贄いけにえに供え、全軍中に重きをなす元老たちを招いた－ネストルを真先に、ついで王イドネウス、両アイアスに、テュデウスの子、6人目にはその知謀ゼウスにも劣らぬオデュッセウスを。大音声のほまれも高きメネラオスは、兄の多忙を察して招かれるのを待たずに自らその場に赴いた。一同が牡牛のまわりに立ち、粗挽きの麦を手にとると、王アガメムノンは一同を前にして祈願を籠めていうよう、

「誉れも位もともに並ぶ者なく、黒雲を集め高天に住まい給うゼウスよ、願わくはわたくしめが、プリアモスの大広間の煤に黒ずんだ梁をまっさかさまに叩き落とし、門扉は燃えさかる火に焼き尽くし、またヘクトルめの胸の辺りを蔽う肌着をば、青銅の刀でずたずたに切り裂いてやりますまでは、陽も沈むことなく、闇も訪れませぬよう。…」
このように祈ったが、クロノスの子はこの時はまだその願いを叶えようとはせず、生贄は嘉納したものの、願わしくもない労苦をさらに増やそうとした。さて一同は祈願して粗挽きの麦を撒いた後、まず生贄の牛の首をもたげ反らし、その咽喉を裂き皮を剥ぐ。腿を切り取り、二重に折った脂身につつきみ、その上に生肉を置く。もはや葉も落ちた薪にかざしてこれを焼き、臍物を串に刺して丹念に焙り上げ、それから残らず串から外す。調理の仕事もやがて終わり、食事の用意も整うと宴に入り、料

理は一同に等しくゆきわたって、満ち足りぬ想いを抱くものは一人もない⁶⁾。（ホメロス『イリアス』）

アガムムノンは、ネストルらの「全軍中に重きをなす元老たち」を招き、ゼウス神に「見事に肥えた5歳の牡牛を生贄」として捧げ、戦勝を祈った。その後に、手ずから生贄の牛を解体調理し、元老たちにふるまったのである。共に祈り、食卓を囲むことは、人びとの共同性を担保するために非常に重要であったと考えられる。

『イリアス』から供犠がおこなわれている場面を引用したが、実際、ブルクハルトによれば、ギリシア人は太古の時代からきわめて「熱心な供犠者」であった。供犠とは、特定の宗教的目的と共同体の結束のために犠牲を神に捧げることを意味する。犠牲が古代ギリシアにおいて意味したことについては、ローマ帝国皇帝「背教者」ユリアヌスの「無二の親友として、また古代宗教を復興しようとする皇帝の努力の後援者として鼓吹者」⁷⁾として知られているサルスティウスの「神々と世界について」の一節が参考になるだろう。サルスティウスによれば、「犠牲のない祈りは単なる言葉にすぎないのであり、犠牲を伴ってそれは生きた言葉になる。言葉は生命に意味を与え、生命は言葉を活かすのである」⁸⁾。祈りの言葉は、生贄となる動物の生命が捧げられることで生きた言葉となる。だからこそ、祈りには犠牲が不可欠だったのである。

古代ギリシアにおける供犠の起源は、ブルクハルトによれば、個々の家でおこなわれていた祭祀にあるという。家の祭祀が行われた場所は、大広間（四角いメガロン）の中心にある丸い炉ヘステイアであり、家の中心部にあつた。オイコス家の中心であると同時に、家そのものの象徴でもあつた炉は、オリュンポス12神の一柱である女神ヘステイア（Hestia）と結びついている。ヘステイアという語は、普通名詞では炉すなわち「火を焚く場所」⁹⁾を意味しているが、固有名詞としては炉の女神ヘステイアを指しているからである。

このような炉の女神ヘステイアを祀るという古代ギリシアの習慣の出発点

プリュタネイオンで正餐を（的射場）

となったのは、ブルクハルトによれば、「家の炉のかたわらで神々の像を造るという太古の習慣であったかもしれない」という。「炉のかたわらにまず死者が埋葬され、敬われたが、それと同時に、たぶんそもそもの始めから炉の炎も敬われた」¹⁰⁾のである。この炉の祭祀は、古代ギリシアにおける家族を「宗教的結合の力」¹¹⁾によって固く結び合せていた。このような炉の女神ヘスティアを中心にした家の祭祀こそが、ブルクハルトによれば、ギリシア世界での公的な「あらゆる事柄の堅固な基盤を形作り」、「公的祭祀の起源的基礎をなし、また永遠に新しい源泉」¹²⁾であったという。

要するに、古代ギリシア世界においては、宗教行事の中心は教説ではなく供犠であり、それは何よりもまず家庭内でおこなわれる祭祀として始まり、また維持されていた。日常的に供犠をおこなうのは特別な身分の神官職ではなく一般市民であったことは、重要な意味をもっていた。家庭内での祭祀をきちんと執りおこなうことができれば、当然のことながら公的な祭祀をおこなうこともできる。したがって、専門職や階級としての聖職者は、古代ギリシア世界には存在していなかったのである。ブルクハルトは、このことこそが古代ギリシア宗教の特質であり、「この宗教の力と持続の主要原因」¹³⁾であったと述べている。

1.2. 女神ヘスティアと炉

前節では、古代ギリシアの宗教が供犠宗教であり、その源泉となっていたのは、家庭内でおこなわれていた炉の女神ヘスティアを祀る祭祀であることを見てきた。ここでは、そもそも炉と女神ヘスティアとがどのように結びついていたのかを、ギリシア神話を参照することで確認し、同時に古代ギリシア世界において炉の女神ヘスティアが意味していたものを明らかにする。

女神ヘスティアは、オリュンポス12神のうちの一柱であり、レアとクロノスの間に生まれた6柱の子のうち最初の子である。クロノスは、母のガイア大地と父のウラノス天から「己の息子によっていつの日か打ち倒される定めになっている」というのを聞いていたので、「その子どもたちが聖い母胎から膝へ生

プリュタネイオンで正餐を（的射場）

まれ落ち着く片端から」「子どもたちを呑み込んで」¹⁴⁾いた。したがって、まず「最初に生まれたヘスティアを呑み」¹⁵⁾こんだ。後から生まれてきた弟妹も同じように父クロノスが呑み込んだ。末子ゼウスだけは母レアの機略によって救われ、成人したゼウスは策謀によって父クロノスの腹から兄弟姉妹を救い出した。最初に呑み込まれたヘスティアは、続けて呑み込まれた弟妹たちに押し込まれてクロノスの腹の一番底にいたため、吐き出されたのは最後であった。その結果、ヘスティアは長子でありながらも兄弟姉妹中もっとも若い女神となったのである¹⁶⁾。

ヘスティアは、同じオリュンポス 12 神の一柱である美と愛の女神アフロディーテと折り合いが悪かった。神々の中でもアフロディーテはある意味で無敵であった。戦いの神々のように暴力的な支配を行うこともなく、身体的強制力を使うこともなく、動物も、人間も、神でさえも、やさしさと誘惑という武器によって征服することができたからである。アフロディーテの魔術に抵抗できる存在は、天上にも地上にも海中にもいなかったが、ただアテナとアルテミスとヘスティアの三女神だけが抵抗することができた。この三女神は処女であることを頑なに決意しており、その固く変わらぬ意思でもって女神アフロディーテの愛と誘惑の力を拒んでいたのである。

この女神たちの不変の意思、変化への頑固な抵抗の姿勢は、とくにヘスティアについては、『アフロディーテ讃歌』において強調されている。ポセイドンとアポロンがヘスティアに恋をして言い寄ったが、彼女は頑としてそれを拒んだのである。

アフロディーテの業は、^{かしこ} 畏い処女神ヘスティアの心にもかなわない。

狡知に長けたクロノスはこの女神を長子として生んだが、
^{アイギス} 神威楯をもつゼウスの神慮により、女神はまた末の子ともなった。

この尊い女神にポセイドンとアポロンとが求婚したが、
女神はさらにこれに应ぜず、かたくなに拒んだ。して、
^{アイギス} 神威楯をもつゼウスの頭に手を触れて、いとも尊い女神は、

プリュタネイオンで正餐を（射場）

永遠に処女の身たらん、との大なる誓いを立てたのだが、
その誓いは遂げられたのであった¹⁷⁾。（ホメロス『アフロディーテ讃歌』）

ポセイドンとアポロンからの求愛を断ったということは、美と愛の女神アフロディーテの魔術を拒絶したということである。というのも彼らの求愛の背後にはアフロディーテがいたからである。それどころかヘスティアは、永遠に処女でいようと決意し、それを確かなものにするために、神々の王たるゼウスに「大なる誓い」を立て、そして「この誓いは破られることはなかった」。ゼウスは、結婚の喜びを放棄したヘスティアに対し、代わりに家を守る権能を与えたとアフロディーテ讃歌はうたっている。

父神ゼウスはこの女神に、結婚に代えてうるわしい名誉を授けた。
それゆえに女神は最も良い座を選び、家の真ん中に座を占めている。
またあらゆる神殿において崇められ、
なべての人間たちは、この女神を神々のうちで最も尊ぶ¹⁸⁾。（ホメロス『アフロディーテ讃歌』）

そもそも古代ギリシアにおいて「家の真ん中」にあるものといえば炉であった。王宮であれ、一般市民の家であれ、家屋は人びとの団らんの場となる広間を中心にして建てられており、そしてその広間の中央に設けられていたのが炉だからである。ゼウスが結婚に代わるうるわしい名誉として授けた「家の真ん中に座を占め」ることとは、すなわち^{ヘスティア}炉が女神ヘスティアの化身となったということである。ヘスティアは、炉の女神となったのである。『ヘスティア讃歌』では次のようにうたわれている。

ヘスティアよ、
不死なる神々と地上を歩む人間たちとの
すべての高き住居に、永遠の御座所と
至高の榮譽とを得たまいし女神よ、
汝がもちたもう権能と榮譽はうるわし¹⁹⁾。（ホメロス『ヘスティア讃歌』）

炉の女神というよりもむしろ炉そのものが象徴化された存在であるヘスティアは、炉が家の中心であった古代ギリシア世界においては、家庭生活を守る神としてすべての家で崇められていた。また、神々の住居すなわち神殿にもヘスティアの座があるというのは、神々に犠牲を捧げるために神殿に炉が設けられていたからである。

ヘスティアの聖所は家あるいは神殿の中心である炉であることから、他の神々とは異なり、そこから離れて動き回ることにはないとされていた。プラトンは『パイドロス』のなかで、オリンポスの神々が宇宙を行進する様を描いているが、ヘスティアだけは参加せずに、「神々のすみかにとどま」っている。

さて、天界においては、まずここに、偉大なる指揮者ゼウス、翼ある馬車を駆り、万物を秩序づけ、万物を配慮しながら、さきがけて進み行く。これにしたがうのは、11の部隊に整列された神々とダイモーンの軍勢。これはつまり、炉をまもる女神ヘスティアのみひとり、神々のすみかにとどまるからである。そのほかの神々のうちで、12神のなかに数えられ、隊長の地位に任ぜられている神々は、それぞれ自分が配置された隊列にあって指揮をとる。まことに、この天球の内側には、あまたの祝福された光景、あまたの祝福された行路があり、幸福な神々の種族は、それぞれ自らの任務をはたしつつ、この幸多き旅路をめぐるものである。この行進についていくことをのぞみ、しかもついて行くことのできる者は、誰でも行進に参加する²⁰⁾。(プラトン『パイドロス』)

「11の部隊に整列された神々とダイモーンの軍勢」というのは、オリンポス12神からヘスティアを除いた残りの神々が指揮する軍勢である。つまり、ゼウスに先導された10神とその他の神々、ダイモンなどが空を昇って行くのだが、ヘスティアだけは神々の家にとどまってじっと動かず、その場を離れなかったということである。古代の宇宙観では、他の諸天体がそのまわりを運行する宇宙の中心として地球をおくのがオーソドックスな考え方であったから、ただひとり「神々のすみかにとどまる」と言われるヘスティアと

プリユタネイオンで正餐を（的射場）

は、地球にはかならないであろう。事実、地球は一般にもしばしばヘスティアと呼ばれたのである²¹⁾。詩人や哲学者たちは、ヘスティアのことを、宇宙の中心にある不動の大地と同じものと考えたのではないだろうか。

女神ヘスティアは^{ヘスティア} 炉を象徴する女神であり、また炉は中心を意味するため、ヘスティアの神性には中心の象徴も含まれていることを見てきた。ヘスティアは、丸い炉という形態的な類似性を元にした、中心を意味するもう一つのもの結びついている。「オンパロス（へそ）」である。炉は、家の床から直接大地に埋め込まれていることから、家と大地を結びつける「オンパロス（へそ）」のようなものと考えられていた。オンパロスは、古代の宗教的な石の遺物の名でもある。ゼウスが2羽の鷲を放ち、2羽は世界を横切って飛んで、世界の中心で出会ったという伝説にもとづき、オンパロスはこの位置を示すものとして、地中海各地に立てられていた。その中でもデルフォイのアポロン神殿にあったオンパロスが一番有名である。デルフォイのアポロン神殿にあった聖石オンパロスは、デルフォイが世界の中心であることを象徴していた。アイスキュロスの『慈悲の女神たち』でも、聖石オンパロスについて「全世界の真ん中にある^{とおと} 聖い臍石」²²⁾とコロスに語らせている。デルフォイは、世界のへそと考えられており、アポロン神の神託を求めて、ギリシアの各地からたくさんの人びとが訪れていた。

聖石オンパロスは、丸い炉²³⁾と同じように中心というシンボリックな意味を持ち、その形態的な類似性は古代の人びとに意識されていた。ヴェルナンによれば、ヘスティアを描いたいくつかの図像には、ヘスティアが家の祭壇ではなく、聖石オンパロスの上に座しているところが描かれており、デルフォイにある聖石オンパロスは女神ヘスティアが座る席であると言われていた²⁴⁾。

2. オイコスとヘスティア

2.1. ^{オイコス} 家 と ^{ヘスティア} 炉

アリストテレスが、人間の本質を「ポリスの動物」(zoon politicon) と把

握したことはあまりに有名であるが、それは、共同性こそが人間の本質であり、共同体を構成することで人間は人間らしく生きていくことができるという言明であろう。共同体の成員であることが人間の条件であるということを端的に示しているのが、次の引用である。

国が自然にあるものの一つであるということ、また人間は自然にポリス
的動物であるということ、また偶然によってではなく、自然によって国
をなさぬものは劣悪な人間であるか、あるいは人間より優れた者である
かのいずれかであるということである、前者はホメロスによって

「兄弟団の一員でもなく、法共同体にも属さず、^{フラトリア} 炉もない奴だ」^{ヘステイア}

と非難された人間のようなものである。何故なら自然によってこのよ
うな者は、とりもなおさずまた戦を好む者であるから、というのはこのよ
うな者はちょうど碁の孤立した石のように孤独なものだからである²⁵⁾。

（アリストテレス『政治学』一部改訳）

このホメロスの引用箇所は、『イリアス』第9歌で老将ネストルが、トロ
イア攻めの総大将アガメムノンに対して忠告をする場面にてでくる言葉であ
る。トロイア勢との戦いで劣勢に立ち、落胆したアガメムノン王は集会を開
き国許に引き上げることが提案したのに対して、若き武将のディオメデスが
反対する。そこで老ネストルが立ち上がり、意見を述べ始める。その場面に
でてくるのが、「厭うべき内輪揉めなどを望むものは、^{フラトリア} 兄弟団の一員でもな
く、法共同体にも属さず、^{ヘステイア} 炉もない奴だ」²⁶⁾ なのである。ホメロスの引用
が明らかにしているのは、古代ギリシアにおける共同体の成員資格の最低条
件である。すなわち、フラトリアという仲間団体の成員であること、法共同
体に属していること、そして炉を所有しているということである。

炉は家の中心であり、すべての家は炉を有していたことから、炉は家共同体
を象徴するものであった。つまり、炉を持たないということは、^{オイコス} 家を持たない
ことと同義であり、^{オイコス} 家を持たないということは、市民であることの絶対条
件であった分割私有地を持たないことと同義であった。つまり、炉を持たな

プリユタネイオンで正餐を（的射場）

い者とは、端的に言って市民ではなく、したがって、「共同することの出来ない者」を意味していたのである。アリストテレスによれば、「共同することの出来ない者か、或いは自足しているので共同することを少しも必要としない者は決して国の部分ではない。従って野獣であるか、さもなければ神」²⁷⁾であり、いずれにせよ、人間のカテゴリーから外れるとされるのである。

共同体の最小単位は、アリストテレスにとって、というよりも古代ギリシア世界にとってと言うべきであろうが、^{オイコス}家であった。家についてアリストテレスは次のように述べている。

日々の用のために自然に即して構成された共同体が家であって、その成員たちをカロンドスは「食事を共にするもの」と呼び、クレタのエピメニデスは「飯櫃を同じうするもの」と呼んでいる²⁸⁾。（アリストテレス『政治学』）

^{オイコス}家共同体は「日々の用のために」構成された共同体であると同時に、^{ポリス}政治的共同体を構成する最小単位の共同体でもあった。その家共同体の共同性を担保したのが食卓である。それゆえ、家共同体の成員は、「食事を共にするもの」とか「飯櫃を同じうするもの」と呼ばれたのである。食卓の共同が家の共同性を担保したのであるが、それを食卓共同体たらしめたのは、^{ヘスティア}炉がある大広間での宴席であった。つまり、炉のある大広間での家族全員での食事によって家共同体としての一体性を保証したのである。同時に、こうした炉と食卓による家共同体の一体性の維持は、女神ヘスティアの監督の下におこなわれるとされていた。ホメロスの『ヘスティア讃歌』は次のようにうたっている。

そも、あなたのましまさぬところでは、
死すべき身の者たちは宴催することはできぬがゆえに。
宴にあたっては、まず第一に、また最後に、
ヘスティアに甘き美酒灌ぎ献ずるが慣いゆえ²⁹⁾。（ホメロス『ヘスティア

ア讃歌』)

ヘスティアは宴を司る特権を与えられていたがゆえに、宴はこの女神への祈りで始まりかつ終わる。ヘスティアが宴の時間の円環を閉じる³⁰⁾。神々への犠牲が供される場所でもあり、女神そのものでもあり、家共同体の中心でもある炉で調理された食べ物、宴に参加した者のあいだに宗教的連帯感をもたします。炉の女神^{ヘスティア}という表象を囲んで、家族の環は閉じ、家族の絆は強まるのである³¹⁾。

2.2. 嘆願の場としての炉

炉^{ヘスティア}に象徴される家は、閉じられた空間を意味し、外界の脅威から保護された空間であった。家^{オイコス}という言葉は、共に暮らす人間集団としての家族を意味すると同時に、住居としての土地にも結びついていた。そして、女神ヘスティアが司るオイコスの中心とは、土地を安定させ、その境界を定めて固定する地点である。したがって、家族の財産たるクレーロス（分割地）の売買には強い抵抗があった。「都市国家のもの」と言われている土地を所有する権利を外国人に与えることを拒否する理由でもあった。クレーロスという分割地は、市民の特権のしるしだからである³²⁾。

しかし、女神ヘスティアの炉は、閉じられた空間を表象すると同時に、外に対して開かれた空間も意味した。炉^{ヘスティア}が象徴する中心は、孤立し閉ざされた世界だけでなく、相関的に同じような中心が別にもあることを前提としているからである。炉^{ヘスティア}が置かれた大広間は、接待の場、社交の場でもあったのだ。家^{オイコス}のメンバーにとって炉は、家の中心であると同時に、地下の神と天上の神の交流のルートでもあり、宇宙の端から端まであらゆるところをつなぐ軸でもあった。空に向かって船の甲板にしっかりと据え付けられたマストのイメージを思い起こさせると言ってもいいかもしれない³³⁾。つまり炉は、かけ離れた二つのレベルの宇宙のあいだを循環する道ともなるのである。

炉、そして、その周りでの食事は、家族の一員でないものに対して家族の

プリュタネイオンで正餐を（的射場）

環を開き、家族という共同体の仲間にいれるという役割も持っていた。自分の国を追い出され、外国をさ迷う人は、炉のそばにうずくまることで保護を嘆願するのである³⁴⁾。この炉の傍らにうずくまり嘆願する場面が、ホメロスの『オデュッセイア』にある。それを紹介したい。

オデュッセウスは、バイエスケス人の国に漂着した。バイエスケス人の国の王がアルキノオスであり、娘はナウシカアである。女神アテナの配慮でナウシカアは、オデュッセウスを水辺で見つける。まず引用するのは、そのナウシカアがオデュッセウスの帰国のためには、父親の王に嘆願するようにアドバイスしている箇所である。

前庭を通して屋敷の中へ入ったら、急いで大広間を通り抜けて、わたしの母のところへ行きなさい。母は炉辺で火影を浴びながら、柱に背をもたせかけて坐り、後ろには女中たちを侍らせて、海の貝で染なした、目も醒めるような紫の糸を紡いでいます。母の席のすぐ近くに父の椅子があり、父はそこに坐って神様のように威厳のある姿で酒を飲んでいます。故国はいかに遠かろうとも、一刻も早く帰国の日を迎えて喜びたいとお望みなら、父の傍らを通り抜けて、母の膝におすがりなさい。もし母がそなたに好意を持てば、その時こそは故国へ帰って立派なお屋敷に戻り、身内の方々にも再会できる望みがもてましよう³⁵⁾。（ホメロス『オデュッセイア』）

王女ナウシカアは人目を避けるため、オデュッセウスを途中で足止めする。アテナが少女に扮して、オデュッセウスを王宮に案内する。

堅忍不拔の勇士オデュッセウスは、アテネが身のまわりにふりかけてくれた濃い霧に包まれて広間を通り抜けた。が、アレテとアルキノオス王の近くまで来て、アレテの膝に手をかけて縋ると、その時神秘的霧は彼のまわりから消え去った。広間の中の一同は、男の姿を見て声もなく静まり返り、呆然として眺めるのみであったが、オデュッセウスは嘆願し

ていうには、

「神のごときレクセノルのご息女アレテよ、さまざまな苦難に遭った末、御父君とあなたのお膝に縋りに参った者です。また、ここで食事をなさっておいでの方々にもお頼みいたしたい。…」

こういうと、炉の火の傍らの灰の中へ坐り込んだ。一座はしんと静まり返ったが、ややあつてようやく老雄エケネオスが口を切った。バイエクス人の中では最長老で故事に通じ、弁舌にも他にぬきんでていたが、一同に向かい善意を籠めていうには、

「アルキノオス王よ、異国からの客人をこのように床の上、それも炉の灰の中に坐らせておくのは宜しからず、また礼にも背きましょう。…大切に扱うべき嘆願者には常に付き添っておられる、雷を楽しむゼウスにも神酒を献じようではありませんか。また女中頭には、家に用意のあるもので何か夕餉を調べ、客人にふるまわせていただきたい。」³⁶⁾（ホメロス『オデュッセイア』）

バイエクス人の王アルキノオスの宮殿の炉のある空間で、王は領主たちと会合を持っており、その炉辺では王妃アレテが糸を紡いでいた。そこにオデュッセウスが現れ、帰国の手伝いをして欲しいと嘆願している場面であるが、まさに炉が嘆願の場として象徴的に使われている。炉辺に坐りこんで嘆願した場合は、それを受け入れることが常識であったのであろう。

外国人との関係に関しては、家に客を受け入れる場合も、外国へ旅行したり、使節として外国に行き無事帰国したりする場合も、いずれもヘステアの領域である。外国人はまず炉に案内され、そこに迎え入れられ、そこでご馳走にあずからなければならない。家の空間にまず受け入れられなければならない、外国人は接触も取引もすることもできないからである。

3. ポリスの形成

3.1. プリュタネイオンとポリスの形成

ポリスの形成についてアリストテレスは、「いくつかの村コメーから生じ、言うなればいまやあらゆる自足の要件を満たした、終極の共同体が国家である」³⁷⁾と述べているが、もちろん、単なる村コメー共同体の結合ではなく、実際に人びとが都市に移り住むという意味での集住シユノイクスモスによってなされた。集住シユノイクスモスによるポリスと呼ばれる都市国家の形成は、アテナイだけに見られた現象ではなく、紀元前8世紀頃ギリシアの各地で見られた。前述したように、ポリスの形成を促したのは、ウェーバーによれば、「慢性的な戦争状態」³⁸⁾である。村共同体同士の戦いだけでなく、より強力な外敵からの侵略にも備える必要があったからである。

アテナイ・ポリスの形成は、民主政期に国家的な英雄として崇拜されていた神話上の王テセウスの功績に帰せられている。プルタルコスは、彼の『英雄伝』の中でアテナイ建国の英雄テセウスを取り上げ、アテナイ建国の経緯について次のように述べている。

アイゲウスの死後、テセウスは大きな驚嘆すべき仕事を思い立ち、アッティカに住んでいた人びとを一つの町に集住させ、それまでは散在していて全部に共通の利益のために呼び集めることが困難であるばかりでなく時には互いに不和となって戦うこともあった人びとを、一つの国家の一つの民衆とした。そこでそれぞれの部落にあった中央庁舎デーモスや評議会議場プリュタネイオンや役所を廃止して、すべてに共通な一つの中央庁舎デーモスと評議会議場プリュタネイオンを現在の町にあるところに作り、その国家をアテナイと名づけ、共通の祭典パンアテナイア祭を創始した。（プルタルコス「テセウス」『プルタルコス英雄伝』一部改訳）³⁹⁾

このテセウスの建国神話からまず読み取ることができるのは、アリストテ

レスが述べているように、ポリスの形成は村々の結合によってなされたのだが、たんなる村々の結合によるポリスの形成ではなく、ある意味で村を捨てて人びとが一つの町に共同移住することでポリスという都市国家の形成がなされたということである。それゆえに各村落にあったプリユタネイオンという中央庁舎の統合が行なわれたのである。テセウスが一つのプリユタネイオン⁴⁰⁾を作ったというのは、ポリスの統合と独立を象徴する聖なる火を燃やし続けるための「共通の炉」(hestia koine)⁴¹⁾を備えておく建物としてのプリユタネイオン、つまり、中央庁舎を作ったということであり、ポリスを一つの「祭祀団体」とした⁴²⁾ということであった。

このテセウスによるアテナイ建国神話の意味をもう少し丁寧に見ていこう。

アリストテレスは、「日々のではない用のために一つ以上の家からまず最初のものとして出来た共同体は村である」⁴³⁾と述べているが、個々の家の中心に^{ヘステイア}炉があったように、村の中心にも^{ヘステイア}炉をもつプリユタネイオンがあった。個々の家の炉が私的な炉だとすれば、村の炉は「共通の炉」すなわちヘステイア・コイネ⁴⁴⁾という名で呼ばれていた。プリユタネイオンという村の中央庁舎は、その大広間に「共通の炉」を持っていたのである。つまり、古代ギリシアにおいては、村共同体それぞれが祭祀団体であり、その団結を象徴するものとして炉の女神ヘステイアを祀っていたということである。炉の女神ヘステイアは、それぞれのプリユタネイオンの大広間にあり、そこで村の有力者たちは共同の食事をしていた。それが正餐である。よって村々の統合によるポリスの形成とは、行政機構の統合にとどまらず新たな祭祀団体の形成を意味したのである。

ウェーバーは、ポリス形成にあたってのプリユタネイオンの統合の意味を次のように説明している。ポリスの形成というのは、「宗教的に兄弟の契りを結ぶこと」⁴⁵⁾によってなされたのであり、よってポリスは「兄弟盟約として構成された団体」⁴⁶⁾なのである。それゆえ集住によるポリスの形成においては、「諸団体が従来それぞれの正餐のために用いてきたいくつものプリユタネイオンを廃止して、その代わりに都市の単一のプリユタネイオンを設置

プリュタネイオンで正餐を（的射場）

するという手続き」が不可欠だった。ポリスの単一のプリュタネイオンの設置というのは、「兄弟盟約の結果としての都市市民の諸ジッペ〔氏族〕の食卓共同体を象徴」⁴⁷⁾したものなのである。

つまり、集住によるポリスの形成とは、それぞれの村共同体がもっていた祭祀団体としてのまとまりを放棄し、新たな単一の祭祀団体を形成したということであり、単なる氏族や種族の寄せ集めではなく、プリュタネイオンの統合によって新たな食卓共同体を形成し、新たに市民団を形成したということである。ウェーバーは、都市の成立と存続を可能ならしめたものとして「一方においては、宗教的に兄弟の契りを結ぶこと、また、他方においては、自弁で軍事的武装を行うこと」⁴⁸⁾としているが、武装自弁の分割地所有農民を中心に構成された団体としてのポリスは、「市民たちの—市民としての資格にもとづく—団体的信仰」⁴⁹⁾によって一体となったのである。

3.2. ポリスの統治機構とプリュタネイオン

ポリスが形成される前の、いわゆる暗黒時代の王政は、ホメロスが書いた『イリアス』や『オデュッセイア』に反映されている王政ということで「ホメロスの」王政と呼ばれている。それは、官僚制を備えたミケーネ社会の王政とは大きく異なっていた。農民はミケーネ社会のように王に隷属してはいなかった。クレーロスという分割地を所有し、武装自弁で戦いに出るような自由農民であった。そのような自由農民からなる村共同体の中であって、王パシレウスというのは、村共同体の部族の長の中でもっとも尊敬されている者⁵¹⁾として現れているにすぎなかった。王というのは、あくまでも共同体成員のなかの有力者の一人、その富において差はあるものの身分的な差はない、いわば「同等者のなかの第一人者」(*primus inter pares*)⁵²⁾にすぎなかったのである。

ホメロスの王政において、王権を制約すると同時に補佐した制度は二つあった。一つは、有力者たる名門貴族からなる「評議会」フーレーであり、もう一つは、農民戦士からなる自由人総会すなわち「民会」アゴレーであった⁵³⁾。共同体のあらゆる重要事は、このような王パシレウスを補佐するとともにその権利を制限する評

プリュタネイオンで正餐を（的射場）

議会にはからなければならなかった。非常事態にあつては、分割地を所有する農民戦士からなる民会にも相談しなければならなかった⁵⁴⁾のである。このような評議会と民会とは、ポリス形成後もそのまま継承され、民主化の核となり、制度化されていく。

前述したアテナイ建国の伝説の王テセウスは、集住をしる「有力者たちには王のいない国制と民主政を約束し、自分はただ戦争の指揮者および法律の守護者になるだけで、他のことについてはすべての人に平等の関与を認める」⁵⁵⁾と約束したのである。つまり、集住によって新しいポリスが形成された暁には、自ら王政を廃し、有力者たる貴族たちに権力を譲渡することを約束したのである。

ホメロスの王政において、^{バシレウス}王は、臣下たちを対立させるような紛争を解決する責任をもつ裁判官、神々を祭る儀式の最高の長たる神官、戦時には軍隊を統率する最高指揮官⁵⁶⁾としての役割を有するにすぎなかった。が、この三つの権限もポリス形成後には、それぞれの執政官としてのアルコンによって担われていくのである。

アリストテレスの『アテナイ人の国制』は、ポリス形成期の統治権力がどのように分与されていったのかを描いている。

役人は名門や富裕者の間から任ぜられ、最初は終身、後には10年間勤める定めであった。役人のうち最も古く、かつ最も古いものは「^{バシレウス}王」とポレマルコスとアルコンであった。これらのうち最も古いのは王の役で（これは祖先伝来の制度であった）、次に王たちのうちに軍事に耐えぬ柔弱な者が出た結果ポレマルコスの役が加わった。（アリストテレス『アテナイ人の国制』⁵⁷⁾

ここで「役人」と言われているのは、今でいうところの官僚のことではもちろんなく、アルコン（arcon）というポリスの執政官のことである。アテナイのポリスでは、最初は貴族政ポリスとして形成されたので、王が担っていた役割が、貴族によって占められていたアルコンに分有されていく様子が

プリュタネイオンで正餐を（的射場）

描かれている。王権が、ポリスが形成された後では、有力者たる貴族によって分有されるようになったのである。王権は世襲が原則であるが、ポリスのアルコンという執政官の任期は、最初は終身であり、やがて10年に、最終的には1年になった。有力貴族の輪番制によって担われていくのである。もちろん後の民主政ポリスでのように、市民の誰でもがアルコンという執政官になれる訳ではなく、その職に任ぜられたのは「名門や富裕者」であった。

「王たちのうちに軍事に耐えぬ柔弱な者が出た結果ポレマルコス役が加わった」というのは、^{バシレウス}王が保持していた「戦争の指揮者」としての権限が、貴族に奪われたことを示している。この変化の背後には、王と貴族の間の激しい闘争があったに違いない、その過程の中で、王はおそらく貴族層の中に埋没することになったのだろう。王が一手に握っていた権限は、行政の最高責任者としての3人のアルコンに振り分けられた。最も古いのが「^{バシレウス}王」という名のアルコンで、そこからポレマルコスという名のアルコンが出てきて軍事を担うようになったというのである。3人のアルコンのうちで一番新しいアルコンが、まさにアルコンという名のアルコンである。このアルコンが、筆頭執政官として統治の実権を握っていた。最初は、3つだったアルコン職は、後に9つに増やされた。そして、この筆頭アルコンの執務官庁こそが、我々が見てきた、その大広間に女神ヘスティアを祀る炉をもつプリュタネイオンなのである。

すべて9人のアルコンと一緒に仕事をしたのではなく、^{バシレウス}「王」はプリュタネイオン付近の今日いわゆるブコレイオンを占めていた。アルコンはプリュタネイオンを占め、ポレマルコスはエピリュケイオンで仕事をしてきた⁵⁸⁾。(アリストテレス『アテナイ人の国制』)

^{バシレウス}「王」という名のアルコンは、プリュタネイオン付近のブコレイオンで執務し、筆頭アルコンはプリュタネイオンで、そして、軍事を担っていたポレマスコスという名のアルコンは、エピリュケイオンで仕事をしていたのである。2世紀後半、ギリシア全土を精力的に取材して『ギリシア案内記』を著

プリユタネイオンで正餐を（的射場）

したパウサニアスは、このプリユタネイオンについて次のように述べている。

ディオスクウロイの聖所を越えた上手にアグラウロスの^{テメノス}神殿がある。…近くにプリユタネイオンが所在し、庁舎内にはソロンの成文法が収蔵されているほか、神々の像としては平和の女神エイレーヌと炉の女神ヘステアの像が安置されている⁵⁹⁾。(パウサニアス『ギリシア案内記』)

パウサニアスによれば、プリユタネイオンは、アグラウロスの神殿の近く、つまり、アクロポリスの丘の北東の麓の近くにあったことになる。『アテナイ人の国制』によれば、貴族政ポリスの主要官庁であった「王」^{パシレウス}が政務を執っていた官庁プロレイオンは、このプリユタネイオンの近く存在したことになることから、貴族政ポリスの時代の紀元前8世紀から7世紀には、このプリユタネイオンの近くに主要官庁があり、ここが政治の中心地であったのであろう。

プリユタネイオンは、貴族政ポリスの時代には、筆頭執政官のアルコンの執務する官庁であると同時に、「最高執政官や公賓を接待する迎賓館」⁶⁰⁾としても使われていた。まさにここで村共同体の長である有力者つまり貴族たちが、一同に会し正餐をおこない、そのことで食卓の共同体を形成したのである。ポリスの中心の象徴である炉の火が燃え続け、名誉市民や外国使節団が接待をうける迎賓館としても機能していた⁶¹⁾。前5世紀半ば以降においても「外人功労者顕彰の民会決議には、諸特権付与の項目について、しばしば「プリユタネイオンにおける会食」への招待の一項が付与」⁶²⁾されていたという。それゆえ、ここで正餐にあずかることは、市民にとって最高の荣誉とされていた。外国からの使節や凱戦将軍、オリュンピア競技の勝者などの特に功労のあった人などが、ここで正餐にあずかっていた⁶³⁾のである。

プラトンも『ソクラテスの弁明』のなかでソクラテスにこう言わせている。

諸君に忠告を与えるために閑暇を必要とする一人の貧しき功労者に、ふさわしきものは何であろうか。アテナイ人諸君、かくの如き人には、プ

プリユタネイオンで正餐を（的射場）

リュタネイオンにおいて食事をさせる以上にふさわしいことはないのである⁶⁴⁾。（プラトン『ソクラテスの弁明』）

つまり、ソクラテスを告発したメレトスが、ソクラテスを「死刑に処することを提議した」のに対して、逆にソクラテスが民衆法廷に提議したのが、「プリユタネイオンにおける食事」なのである。

ソクラテスは言う。

もし私が正しきに従って私が当然受くべきものを提議すべきであるならば、私はこれを提議する、すなわちプリユタネイオンにおける食事を⁶⁵⁾。（プラトン『ソクラテスの弁明』）

結びに代えて

「厭うべき内輪揉めなどを望むものは、兄弟団の一員でもなく、法共同体にも属さず、^{ヘステイア} 炉もない奴だ」というネストルの発言、その中での^{ヘステイア} 炉に注目することで、ポリスが強い内的結合力を持った団体として形成されたことを考察してきた。炉を持つということで意味されたのは、それは、^{オイコス} 家を持っているということ、つまり、オイコスというポリスの最小単位としての家共同体の主体であるということであった。オイコスが、家共同体たりうるためには、炉が必要であった。炉辺での会食が^{オイコス} 家のメンバーの共同性を担保していたからである。ギリシアの農民は、オイコスという家共同体の主体であることで、武装自弁の農民戦士となり、市民となるための必要条件の一つを満たしたのである。

家々が集まって村を構成したのであるが、その村の共同性を担保していたのは、その大広間に^{ヘステイア・コイネ} 共通の炉を持つプリユタネイオンである。プリユタネイオンでの会食が、村人の食卓共同体を構成し、村人の共同性を担保していたのである。よって、集住によるポリスの形成とは、それぞれの村共同体がも

っていた祭祀団体としてのまとまりを放棄し、新たな単一の祭祀団体を形成したということである。ポリスの形成というのは、単なる村同士の結合でなく、氏族や種族の寄せ集めでもなく、プリュタネイオンの統合によって新たな食卓共同体を形成し、新たに市民団を形成したということなのである。つまり、ポリスがばらばらの市民の集合体として形成されたのではなく、女神ヘステアと炉という媒介項を介することで、段階的に積み上がり、祭祀団体としての一体性を持ったことこそが、ポリスの団結の秘密であった。

ポリスは防衛団体として形成されたのだが、公的空間としてのアゴラという広場を中心にして建設されることで、そこは言論空間に変容した。その公的空間での活動こそが、古代ギリシア人、殊にアテナイ人を「政治的」(political)にしたのである。アレントは、次のように述べている。

死すべき人間たちと儂い偉業と言葉のために、永遠の住居を受ける都市こそ、ポリスなのである。それは政治的であり、それゆえ他の定住地とは異なっている。なぜならそれは意図的に公的空間、すなわち^{アゴラ}広場を中心に建設されているからである。そこでは自由な人々が、どんな場合でも、平等な仲間として集会を持つことができたのである⁶⁶⁾。(アレント『政治の約束』)

だが、公的な空間としてのアゴラに出ていき、買い物をし、商取引をし、うわさ話に花を咲かせ、政治的な談義をするのは、男たちだった。政治的な存在になったのは、男たちだけだった。女性は、保護された空間である家に閉じ込められたのである。

古代ギリシア世界にもともとあった男は外に、女は家という男と女の役割を固定し、強化するに与って力があつたのは、ポリスが、防衛団体として、戦士共同体として形成されたことである。戦いに比重がかかった社会にあっては、戦士であることが市民であることの必須要件であった。時代が降ったドラコンの国制の時代においても、政治を担う権利は、「自費で武装し得る人々に与えられていた」⁶⁷⁾のである。軍事に傾斜した社会が、公的領域

プリュタネイオンで正餐を（的射場）

から女性を排除し、女性の社会的地位を低下させるのは、ある意味当然の帰結であろう。

それだけでなく、ヘスティアが意味する象徴空間も、ポリス形成後には、特にこの男女の性別役割分業を促進し、固定化する役割を果たしたように思われる。もともとヘスティアの領域は、内部であり、固定され閉ざされた場所、人間が集まって閉じこもる場所、つまり、^{オイコス}家である。ヘスティアの役割は、じっと動かないで家庭の空間の中心で統治することなのである⁶⁸⁾。ギリシア人にとって、家庭的な、閉じられた、そして屋根のある空間は女性的な意味合いを含んでおり、屋外の開かれた空間には男性的な意味がこめられていた。女性の領域は家の中であった。そこが女性の居場所であり、原則としてそこからは出てはならなかった。反対に男性は家から^{オイコス}遠ざかる要素を持つ。オイコスによって、その存立基盤を確保した男たちは、そのオイコスから遠ざかるのである。男は安全で閉ざされた家を離れ、外と人と接触し、よそ者と交渉する。仕事、戦争、取引、交友や公的活動などあらゆる男の活動は、畑、海、戦場、街道そしてアゴラなど、外に向かっていた⁶⁹⁾。

註

- 1) ヤーコブ・ブルクハルト『ギリシア文化史1』（新井精一訳、ちくま学芸文庫（筑摩書房）、1998年）、562頁参照。
- 2) ヘロドトス『歴史 下』（松平千秋訳、岩波文庫、1972年）、182頁。続けてテミストクレスは、次のように述べている。「しかしもし私の計画を実行してくれぬのなら、われわれはこのまま直ちに家族を收容してイタリアのシリスへ移住するであろう。この町は古くからわが国の所有であり、託宣もこの町がわれわれによって植民さるべきことを告げているのだ。」（前掲書、183頁）ブルクハルトが、近世の都市住民との比較の中で述べている、古代ギリシアのポリス住民の「移住可能性」（ブルクハルト、前掲書、565頁）が、ここにははっきりと見て取ることができるだろう。
- 3) ブルクハルト、前掲書、563頁。
- 4) 同書、562-574頁参照。
- 5) ホメロス『イリアス 上』（松平千秋訳、岩波文庫、1992年）、61頁。
- 6) 同書、62頁。
- 7) サルスティウス「神々と世界について」、ギルバート・マレー『ギリシア宗教発展

- の五段階』（藤田健二訳、岩波文庫、1971年改訂）の付録として掲載、239頁。
- 8) 同書、同頁。
 - 9) 『ギリシア・ローマ辞典』ヘステアの項参照。
 - 10) ヤーコブ・ブルクハルト『ギリシア文化史3』（新井靖一訳、ちくま学芸文庫（筑摩書房）、1998年）、453頁。
 - 11) ブルクハルト『ギリシア文化史 1』、124頁。
 - 12) ヤーコブ・ブルクハルト『ギリシア文化史2』（新井靖一訳、ちくま学芸文庫（筑摩書房）、1998年）、384頁。
 - 13) 同書、387頁。
 - 14) ヘシオドス『神統記』（廣川洋一訳、岩波文庫（岩波書店）、1998年）、61頁。
 - 15) アポロドーロス『ギリシア神話』（高津春繁訳、岩波文庫、改版1978年）、29頁。
 - 16) 同書、同頁参照。
 - 17) 「アフロディーテ讃歌』『ホメロス諸神讃歌』（沓掛良彦訳、平凡社、2004年）所収、295頁。
 - 18) 同書、同頁。
 - 19) 「ヘステア讃歌』『ホメロス諸神讃歌』、437頁。
 - 20) プラトン『パイドロス』（藤沢令夫訳、岩波書店、1967年、2012年改版）、72頁。
 - 21) ヘステアが炉を意味すると同時に、大地と結びつけて考えられたことについては、例えば、ドイツ語では herde（炉）と erde（大地）と同語源であり、また英語でも hearth（炉）が earth（大地）の異形であることから分かるだろう。
 - 22) アISKYロス『慈しみの女神たち』（呉茂一訳）『悲劇Ⅰ』（ちくま文庫（筑摩書房）、1985年）所収、286頁。
 - 23) オムパロス（ヘそ）と同じように、ヘステアの炉は丸い。ヴェルナンによれば、ギリシアにおいて丸い形は、土着的で同時に女性的なパワーを表しており、それはまた大地母神のイメージと結びついているのである。家の閉じられた空間のシンボルである炉の丸い祭壇は、ローマ帝国時代に、『夢判断の書』を書いたアルテミドロスによれば、生命と子どもの貯蔵庫である女性の腹と結びつく。アルテミドロス『夢判断の書』（城江良和訳、国文社、1994年）によれば、炉やパン焼き釜に点けた火がすぐに燃え上がる夢は吉兆であり、子どもの誕生を告げる。なぜなら炉や釜は、生命のために必要なものを受け入れるという点で、妻に似る。そして、そこに火が点くということは、妻が妊娠するということなのだ。妊娠する時には、女もやはり熱くなるからだ、という。
 - 24) ジャン＝ピエール・ヴェルナン『ギリシア人の神話と思想』（上村くにこ、デイヴィエ・シッシュ、饗庭千代子訳、国文社、2012年）、256頁参照。
 - 25) Aristotle, *Politics*, (with an English translation by H. Backham, Loeb Classical Library, Harvard University Press, 1932, rep., 1944), p. 8. アリストテレス『政治学』（山本光雄訳、岩波文庫、1961年）、35頁。
 - 26) Homer, *Iliad Books 1-12* (translated by A.T. Murray, Revised by William F. Wyatt, Loeb Classical Library, 2nd edition, London: Harvard University Press, 1999 (2nd

プリュタネイオンで正餐を（的射場）

- edition)), p. 398. ホメロス『イリアス 上』（松平千秋訳、岩波文庫、1992年）、268頁。
- 27) アリストテレス『政治学』、36頁。
- 28) 同書、33頁。
- 29) 『ホメロス讃歌』、437頁。
- 30) 炉が時間の円環と関わっているということについては、アルテミドロスが『夢判断の書』で次のように述べている。「ある男が炉を作る夢を見た。男はその時外国に滞在していたが、そのままその地で死んでしまった。当然の結果だった。炉は定住と終着点の象徴であり、それを外国で造ったとき、そこで生命の終着点を迎える運命だったのである」（314頁）。
- 31) ヴェルナン、前掲書、246頁参照。
- 32) 同書、243頁。
- 33) 同書、282頁。
- 34) ヴェルナン、247頁。
- 35) ホメロス『オデュッセイア 上』（松平千秋訳、岩波文庫、1994年）、166頁
- 36) 同書、177頁。
- 37) アリストテレス『政治学』、34頁。
- 38) マックス・ウェーバー『古代社会経済史』（上原専禄・増田四郎監修、渡辺金一・弓削達訳、東洋経済新報社、1963年）200頁。
- 39) プルタルコス「テセウス」（太田秀通訳）『プルタルコス英雄伝 上』（村川堅太郎編、ちくま文庫（筑摩書房）、1987年）、32頁。
- 40) 古代ギリシアでは、共同体のあるところ必ず「炉」が祀られ、したがって、各都市には「市の炉」があり、聖なる火が燃やし続けられた。市が植民都市を建てる場合にも、市の炉の火が新市にもたらされた。市庁舎（prytaneion）とは、ヘステアを祭る場所にほかならず、ここで食事を受けることは最高の荣誉とされた。
- 41) ヴェルナン、前掲書、336頁。
- 42) マックス・ウェーバー『都市の類型学』（世良晃志郎訳、創文社、1964年）、83頁参照。
- 43) アリストテレス、前掲書、33頁。
- 44) ヴェルナン、前掲書、336頁。
- 45) マックス・ウェーバー『一般社会経済史要論下巻』（黒正巖・青山秀夫訳、岩波書店、1955年）、183頁。
- 46) マックス・ウェーバー『都市の類型学』、81頁。
- 47) 同書、83頁。
- 48) マックス・ウェーバー『一般社会経済史要論下巻』、183頁。
- 49) マックス・ウェーバー『都市の類型学』、81頁。「ポリスを構成するに当たっての本質的な要素は、一当時のひとびとの観念によれば一、諸門閥が兄弟盟約によって一つの祭祀共同体クレイトグマインシャフトに結集するということであつた。すなわち、個々の門閥がそれぞれもっていたプリュタネイオンを、一つの共通のプリュタネイオンによって置き代

え、この都市ブリュタネイオンにおいて〔各門閥選出の〕ブリュタニスたちが彼らの共同の聖餐会を催すことにしたのであり、これがポリスを構成する本質的な行為だったのである。』（『一般社会経済史要論下巻』、184頁）。

- 50) クレーロスというのは、籤という意味であり、共同で専有した土地を籤で分配した、あるいは分割した土地という意味で「分割地」とか「持ち分地」とか言われる。原則は私有地であるが、共同体所有から発しているの、ポリスが形成された後は、ポリスの所有に属するものとして、市民以外に、つまり外国人居留者などに売却したり譲渡することは禁じられていた。市民だけが土地所有者になりえたのである。
- 51) クロード・モセ『ギリシアの政治思想』（福島保夫訳、白水社、1972年）、10頁参照。
- 52) John V.A. Fine, *The Ancient Greeks: a critical history* (The Belknap Press of Harvard University Press, 1983), p. 181.
- 53) 太田秀通『テセウス伝説の謎—ポリス国家の形成をめぐる—』（岩波書店、1982年）、43頁参照。
- 54) 伊藤俊太郎編著『人類文化史② 都市と古代文明の成立』（講談社、1974年）、251頁参照。
- 55) プルタルコス、前掲書、『プルタルコス英雄伝（上）』（村川堅太郎編、ちくま文庫、1987年）所収、32頁。
- 56) クロード・モセ、前掲書、11頁参照。
- 57) アリストテレス『アテナイ人の国制』（村川堅太郎訳、岩波文庫、1980年）、18頁。
- 58) 同書、19頁。
- 59) パウサニアス『ギリシア案内記 上』（馬場恵二訳、岩波文庫、1991年）、84頁。
- 60) ジョン・キャンブ、エリザベス・フィッシャー『図説古代ギリシア』（吉岡晶子訳、東京書籍、2004年）、253頁。
- 61) 周藤芳幸・村田奈々子『ギリシアを知る事典』（東京堂出版、2000年）、129頁。
- 62) パウサニアス『ギリシア案内記 上』（馬場恵二訳、岩波文庫、1991年）、馬場恵二氏の訳注、227頁参照。
- 63) 久保勉「解説」、プラトン『ソクラテスの弁明・クリトン』（久保勉訳、岩波文庫、2007年改版）、110頁参照。
- 64) 同書、58頁。
- 65) 同書、59頁。
- 66) ハンナ・アレント『政治の約束』、ジェローム・コーン編（高橋勇夫訳、筑摩書房、2008年）、155頁。
- 67) アリストテレス『アテナイ人の国制』、20頁。この説明は、紀元前624/3年にドラコンが制定した制度についての説明の箇所に出てくる規定である。該当箇所を、そのまま引用しておく。「参政権は自費で武装し得る人々に与えられていた。彼らは9人のアルコンと財務官とを10ムナを下らない、負債のない財産をもつ人たちから選び、その他の余り重くない役は自費で武装し得る人たちから選び、将軍と騎兵

プリュタネイオンで正餐を（的射場）

長官とは100 ムナを下らない，負債のない財産と正妻から生まれた10歳以上の子供とを示し得る人たちから選んだ。」（前掲書，同頁）

- 68) ヴェルナン，前掲書，226頁。
- 69) 同書，230頁。